
雨

忍足香輔

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

雨

【コード】

N4790D

【作者名】

忍足香輔

【あらすじ】

雨を嫌う少年。その理由がわからない少年は思い悩み続ける。唯一の相談者である姉。その姉は、ひっそりと彼のそばにいるが……

…

「ぼくは考えた」

それは雨が降ってきた夜のこと。ぼくは部屋に一人で机に向かっている。家族はみんな帰ってきているが、物音一つすることは無い。時計はもうすぐ明日になるうとしていた。

雨が降っていると、ぼくは檻に閉じ込められたような気分になる。外に出ようとしても、なんとなく気が乗らない。体が濡れてしまっからだろうか？ でもぼくは体が濡れても気にしない。むしろ気持ちがいいくらいだ。今もぼくの体は濡れている。

「じゃあ何故だろうか？ ぼくは何故外に出ようとしないのだろうか？ 外が暗いからだろうか？でもぼくは、どちらかというと夜型の間だ。夜に行動するのが大好きだ。それに、昼間の雨でもぼくは同じ感覚を味わう」

ぼくは後ろを振り返った。そこには姉が寝ている。音も立てずに仰向けで寝ている。

「姉さんはどう思う？」

ぼくの問いかけに答ええない。姉は何も答えずに、ただ雨の音が部屋の中に鳴り響いている。

「姉さん、ちょっと起きてくれよ」

それでも姉は目を覚まさない。ぼくは姉にまたがった。そして姉の胸を思いつきり鷲掴みにする。

「なんで起きてくれないんだよ？ ぼくの話聞いてくれないんだよ？」

姉の胸の弾力は失われていた。ぼくの力に合わせて返された弾力はもう無い。やわらかく、あたたかかったはずの姉の胸は、いびつによじれ、冷たい。

姉の喉には無骨としか表現しようのない出っ張りがある。ぼくはそれを引き抜いた。

「姉さんはぼくが嫌いになっちゃったのかな？ そんなことないよね。ぼくは姉さんが大好きだもん。すごいすごい大好きだもん。ぼくが大好きなんだが、姉さんだってぼくのこと大好きでしょう？ だって、ぼくは姉さんに包まれているんだから。姉さんがくれたプレゼントに、ぼくは包まれているんだから」

ぼくは何度も何度もナイフを振り下ろした。

「もっとぼくを姉さんで包んで。ぼくは外に出たくないんだよ。雨の日は外に出たくないんだよ。姉さんに包まれるだけで、ぼくは幸せなんだ。はじめて会った夜に言ってくれたじゃないか。ぼくのこと大好きだって。ぼくの言うことを聞いて、くれたじゃないか。叫ぶぐらい必死に、ぼくをお願いしたじゃないか。ぼくに愛して欲しいって」

ぼくは何度も何度もナイフを振り下ろした。何度も何度も何度も何度も何度も何度も。そして、姉はぼくにすべてを見せてくれた。今まで隠していたものを全部見せてくれた。やっと、ぼくにすべてを見せてくれた。

「ああ、姉さん。やっぱり答えてくれた」

ぼくはそれらを抱きしめた。姉が隠していたそれらは、ぼくの全身を姉さんで染めてくれる。ぼくを包み込むのに、十分な量があった。でも……。

「姉さん、なんでこんな冷たいの？ 冷たすぎるよ。まるで雨みただ。それに黒いよ。ぼくの好きな色は赤なのに。なんでこんなに黒くなっちゃったの？ なんでみんな最後はぼくに冷たくするの？」
ぼくは必死で姉に聞いた。目が熱くなり、いくつもいくつも涙がこぼれた。姉はそんなぼくをじっと見つめている。何も言わずにただ見つめるだけ。

姉の顔はきれいで、ぼくは大好きだ。頬をなでると、姉は目からいくつも涙を流して、ぼくに大好きと言ってくれた。何度も繰り返し、ぼくに大好きと言ってくれた。

でも、もう何も言ってくれない。頬をなでても、姉はただぼんや

りとぼくを見るだけ。

「もう、駄目だな」

ぼくはそう呟いた。悲しかった。ぼくは心底悲しかった。

ぼくは隣の部屋に姉を運んだ。姉は見かけによらず重く、力の弱いぼくには重労働だ。だからぼくは何回かに分けて運んだ。今までそうしてきたように。何度も往復しないといけなかったが、さすがにもう慣れてきた。

ぼくは姉が寂しくないように、みんなと同じ部屋に運んであげた。一人ぼつちは寂しいだろうから。

ぼくは最後に姉の頭を運んであげた。その頭を、ぼくは本棚に並べる。ぼくの姉さんたちが、ぼくを見ていた。

「ぼくの新しい姉さんだよ。仲良くしてあげてね」

ぼくはそう言つて、みんなの頬をなでてあげた。髪を櫛で梳かしてあげた。姉さんたちはいろんな化粧をするから困っている。ぼくはそのままが一番なのに、そう言っているけど、姉さんたちは化粧を止めようとしなない。ぼくでも知っている。きつとおしろいをつけているんだね。みんなどんどん顔を白く染めたがる。きつと流行っているんだなとぼくは思う。だって、みんな同じ化粧をするんだから。きつとこの姉も、みんなに影響されちゃうだろうな。少しづつ、少しづつ白く染めていくのだろう。

ぼくは姉さんたちの髪を梳き終わると、ゆっくりと扉を閉めた。

「じゃあぼくは行くね。また新しい姉さんを連れてくるよ。新しい姉さんとも仲良くして欲しいな。きつとここに連れてくるから」

ぼくは玄関に行き、靴を履いた。相変わらず、外は雨が降っている。ぼくは雨が嫌いなのに……。

「そうか」

雨

ぼくは気付いた。なんでぼくは雨の日に外に出たくないのかが。姉さんが流れ落ちてしまうからだね。せっかく姉さんに包まれて

も、雨がぼくと姉さんを引き剥がすんだ」

ぼくは暗い道を歩き始めた。冷たい雨が頭から、顔から、手から、足から姉さんを引き剥がす。

姉さん、姉さん、姉さん・・・・・・・・・・

ぼくに、雨は容赦なく降り続く。

いつまでも、いつまでも

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4790d/>

雨

2009年3月24日10時31分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。